

Views from Orienteering

村越 真

View77: よいイベントとは？

2009年から富士山一周のツーリング「富嶽周回」を行っている。本来は90kmのトレイルイベントになるはずだったが、自然保護団体や官庁との交渉が難航し、ツーリングの形態で実施したものだ。ある年の参加者はたったの40名。だが、完成度の高い地図を渡すと同時に、エイドも3箇所を用意し、参加者のチャレンジ精神をバックアップする体制は十分に備えた。速い人で12時間。28時間が制限時間のイベントである。そこに、当時ロゲイニングで活躍していたIさんを誘った。

Iさんは、もう一つの富士山一周イベントであるウルトラ・トレイル・マウント・フジ(UTMF)のお手伝いもお願いしていたのだが、イベント後の感想をフェイスブックに書き込み、「どちらが本当の意味でいいイベントだろうか？」と問うた。かたや2000人を超える日本最大のイベント、希望者が多くて、抽選で選ばれるだけでも大変だ。スタート・フィニッシュも華やかで、メディアにも盛んに取り上げられる日本最大のトレランイベントであるUTMFと比較されるだけでも光栄だが、Iさんは「富嶽周回こそいいイベントだ」と言いかねない勢いだった。

いいイベントとは何かを考えるときに常に頭に思い浮かぶのは、初めてでた1981年のスイスでの世界選手権だ。コテージの建ちならぶリゾート施設を宿舍・イベントセンターにして行われたが、トレキャンプの時からその施設に滞在していた私たちは、キャンプ最終日にトレーニングから帰ってくると、イベントセンターを手伝うオリエンティアの学生3人が穴を掘っているのを見つけた。どうやら大会に向けて国旗を掲揚するためのポールを立てる穴らしい。

午後から始めた穴掘りで、陽も陰りはじめた3時頃、ようやく3つほどの穴が空いたに過ぎなかった。出場国は21もあるのだ。こんな光景に出会ってしまったのが運のつき、僕らが手伝っていると、トレーニングから帰ってきた他国の選手たちも続々と手伝い始めた。そこは競争心の強いスポーツ選手たちである。「国対抗の穴掘り選手権だ」なんていいながら、21の穴はあつという間に掘りあがった。イベントセンターの統括責任者だったイボンヌ・カスパ

リは、穴掘りを手伝った選手達全てを誘って、近くのカフェでパフェをごちそうしてくれた。今ではあり得ない、「古き良き時代」の大会風景だろう。だが、そこには主催者と参加者が大会成功のために協力しあう姿があった。もちろんその本質は「よいコースを準備すること」「最大限の努力とパフォーマンスでそのコースを走りきること」である。しかし、ささやかな協力の場合は、必ずしもそれが可能ではない参加者にとっては、「そのイベントに参加した」と実感できる貴重な瞬間になるだろう。それが多様に準備されていることが、いいイベントの条件なのではないだろうか。



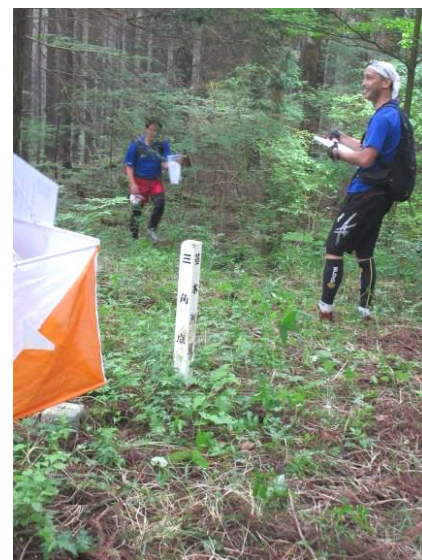
スイスの世界選手権で参加国の国旗掲揚のために穴を掘る筆者

この5月に開催した朝霧高原12時間ロゲイニングで、再び「いいイベントとは」と考えるチャンスに恵まれた。スタート前に競技説明を行った。特に感情も交えず、どちらかというと事務的に必要なことを淡々と話したつもりだった。だが、最後にディレクターである自分自身の紹介をすると、参加者から拍手が贈られたのだった。必ずしも華やかではないその大会だが、12時間の競技のために莫大なエリアとCP数が要求される。そして、イベントディレクターとして、参加者の方にそのイベントを最大限に楽しんでもらうために、プログラムや事前のFBなどでの告知にも最大限の努力をする。参加者の拍手はひょっとするとその努力への評価だったのかもしれない。

フィニッシュが夜になり、その後交流会もあるこのイベントでは、参加者の多くは翌日まで施設に残る。日曜日の午前中、くつろいだ空気の中を参加者が思い思いにエントランスホールで過ごしていた。このイベントで大好きな時間の一つだ。1981年の世界選手権が終わった翌日の午前中、のんびりと街の本屋で本を見ていると、選手権で活躍した地元スイスのディーター・ウルフがランパンとランシャツのくつろいだ姿で選手権を報じる新聞を買いに来て、挨拶を交わしたことを思い出した。



地図が配られると、参加者が真剣な表情でルートを考え始める。地図と自然に向き合う楽しいロゲイニングの時間の始まりである



富士山麓ロゲイニングは、林の中の本格的なナビゲーションが楽しめる日本でも数少ないロゲイニング大会である。



毎回参加してくれる宮崎親子。はじめは引きずられていた娘の愛海ちゃんは、今ではお父さんがついて行けないほど走れるまでに成長した。そんなときの流れを共有できるのも、長年イベント開催を続けるご褒美だろう



暗闇の中、ヘッドライトを照らしながら参加者がフィニッシュに戻ってくる。12時間ならではの光景



ゴール後飲み物を片手にレース談義ができるのもこの大会の魅力

View7: 南極観測隊でオリエンテーリング

初期の南極観測は「家族に遺書を書いていってほしい」と言われるほどの未知への挑戦だったから、激しい訓練が何度も行われた。隊員はもちろんアウトドア経験も豊富で、サバイバルスキルに長けた猛者どもばかり。ところが今では、隊員に選ばれるまで雪上での行動の経験がない隊員も少なくないらしい。もっとも現在の昭和基地の室内は快適そのものだし、長年の経験から隊全体でのリスクマネジメントも進んだから、個人個人のスキルはそれほど必要ないとも言える。

訓練も通常の隊員は冬と夏の2回だけである。さすがに冬訓練は雪中のビバークも含むもので、隊員によっては「あれが一番（越冬も含めて）辛かった」という程度のことはする。だが、夏の訓練は基本的には講義とミーティングのみである。その中に唯一の野外活動がある。実はそれがオリエンテーリングなのである。

国家事業である南極観測でオリエンテーリング。オリエンテーリング関係者としてはそれだけでも嬉しいのだが、「なんだろう」という疑問も湧く。答えは簡単で、もうすでに退職された極地研究所の大御所石沢賢二さんが、春日部オリエンテーリングに所属するオリエンティアなのだ。南極観測では、ブリザードの中、これまで1名の犠牲者を出したことがある。そこまでの大事には至らないまでも、危機的な状況になった観測隊員は何人かいる。地図を読む力がその防止に直結するわけではないが、コンパスも含めたナビゲーションは今でも南極観測の必須スキルであることに変わらない。それを伝えたい、というのが石沢さんの思いである。

選ばれば1年4ヶ月を濃密に過ごす隊員たちにとって、訓練の最大の目的はその親睦である。従って、夜は毎晩飲みニケーションである。その日程の中でのオリエンテーリングだから、のんびり気分転換のつもりで歩いているグループもあるが、真剣に走り続けるグループもいる。そこはさすがに国家事業に選ばれた人材である。ちなみにこの「国家事業」という言葉は、南極観測に枕詞のようについてくる。

「南極料理人」の西村淳も、国家事業だからこそ料理人としての腕によりをかけ、松阪牛のローストビーフをつくり、伊勢エビのエビフライをつくったのである。

夏訓練でのオリエンテーリングは、グ

ループでのスコア0だ。場所も草津の国立大学セミナーハウス周辺だから、コースの難度も低めである。今ならもう少し別のプログラムの提供可能性もありそうである。致命的なリスクが身近にある環境の中で、集団としてどうリスクをコントロールしていくかという課題がある彼らにどんなナビゲーションプログラムが最適か、それを考えることは、オリエンテーリング関係者にとってもチャレンジングな課題ではないだろうか。



飲んだくれの毎日なのに、ガチで走るグループがいるところはさすが「国家事業」の隊員だ



一方で中学生の遠足？を思わせる参加者もいる。ちなみにこのお二人は南極教室実施のための派遣の学校教員の方である



オリエンテーリングの説明をする極地研職員の石沢さん（春日部オリエンテーリングクラブ）

View78:ロゲイニング世界選手権:オーストラリア

第14回ロゲイニングの世界選手権は、ロゲイニングの発祥地オーストラリアのノース・テリトリー州で開催された。州域のほとんどが砂漠であり、居住地も限られている。この周辺随一の街であるアリススプリングスから80kmほど西にいったロス・リバー・リゾートのキャンプ場が会場だ。購入した地図で見ると、アリススプリングスからリゾートまでは地図上で8cm、10万分の1だから8km？ 腑に落ちずによく見ると縮尺が1:1,100,000であることに気づいた。乱視のせいで並んだ1がよくみえなかったのだ。ならば約80km。地図に表現された地形のテクスチャーが日本の地図なら10万分の1の感じだったので、そう誤読してしまったのだろう。であれば、実際の山塊は日本のスケールの10倍。その規模のフィールドだからこそ、1分1秒を競うオリエンテーリングではなく、24時間という競技がふさわしくなるのだろう。

会場に着くと、世界選手権とは思えないのどかさが漂っている。好成績を狙っているマジ組は1割というところか。地図を配る瞬間は行列になるが、行列にも日本の3-6時間大会のような殺気は感じられない。80cm×60cmにちりばめられた83個のCPには茫然とする。しばらくこの茫然感を味わってみよう。作戦の時間はたっぷりあるのだ(3時間)。そのうち、無意識がまあ満足できる方向性を示してくれるだろう。

エリアは東西に走る山の列で南北に区切られ、北は比較的微地形が広がる比高さ100m以下の丘陵地、谷の南側には比高200mの東西に延びる直線的な山地が海馬のMRI画像のような褶曲を見せ、さらにその南側には比高300mの山地がそびえる。エリアごとのアップダウン、ナビゲーションの難しさ、配点を把握し、大まかな作戦を立てることで枝刈りをしていく。

結局ハッシュハウスからは一番遠い(直線で16-18kmほどある)東のエリアがナビゲーション的にも楽しそうだが得点も高い。そこを中心に攻めることになった。途中に広大なスピニフェックス(ハリセンボンのようなとげのある葉先を持つ砂漠に生息する植物)のやぶエリアがある。そこを早めに通過し東のエリアにできるだけ長く滞在する。ひょっとすると夜明けまでハッシュハウス(HH)に戻れない「旅」になりそうだ。どこかで仮眠することもありえる。食料も24時間分持たせることを考えて準備しなければならない。



再び夜が明け、楽しい時間も終わりに近づく。
背後から3.5億年の地球史を感じさせる地層が私たちを見守っている

最初の給水ポイント(WP)までの時間は短い。水を最小限にして軽量化を図る。

のどかなロゲイニングも、スタートでは多くのチームが一目散に走り出す。移動方向は概ね3つくらいに分かれたようだ。私たちは予定どおりに真北に進んで北部のエリアを東に向かって移動する。4時間ほど移動したところで、気持ちが萎えてしまった。あまりにスピニフェックスの藪が鬱陶しかったのだ。ペースも遅いので、オリジナルルートのままでは、時間がかかりすぎる。どのみちどこかでショートカットしなければならない。そのうち、今度は水の補給にも不安が出た。結局後半回ろうと思っていた一部を取ってWPに直行し、その後点数の高い東側エリアを小ルートし、再度WPで給水して、時間に

応じて帰路に就くプランに変更した。この変更は同時に、レース中ハッシュハウスには一度も戻れないことを意味する。今回その可能性も低くはないことを考えて行動食を用意した。天候状態もいいのでどこかで仮眠をとってもよい。最後には道路のラインが確保されているので、たとえ低血糖等になっても、なんとか戻れるはずだ。

天気もよく、日暮れてからはむしろ適温で快調だ。難しいエリアはさすがに骨があるが、22時を過ぎると満月に近い月が昇って、オープンな荒野はヘッドライトを消しても歩けるくらいだ。遠近感を除けば地形も分かる。緊張は強いられるが、24時間ロゲイニングならではのお楽しみの時間である。

途中、田島が眠くなってサバイバルシートをかぶって10分間の仮眠を取る。

ウォーターポイントに帰着後、戻したアルファ米を食べる。スーパーで買ったレトルトのチリ風味サーモンフレークをかけたらめちやくちゃ旨くて元気がでた。エバニューに提供してもらったチンパンジーバーもしっとりしているうえに味も穏やかで、レース中無理なく食べられる。食料的には不安は少ない。

ウォーターポイントを出発したのは夜中の2時。あと10時間。これなら南側をかなり寄り道しながら帰ることができる。途中、さらにもう一回仮眠していたら、通りがかったチームが「休んでいるんだよね？」と心配して声をかけてくれた。ロゲイニングの出場チームは、競い合うというよりも同じチャレンジを共有している仲間だ。

次のウォーターポイント8についてびっくりした。たき火をしているのだ。こんなことは今までになかった。しかも、テントの下では調理までしている。「暖かいもの食べて行きなさい」と言われる。地図を見直すと、ONCと書いてある。訳が分からないがもらえるものはもらっておこう。ここで食事が摂れるなら、食料の不安は払拭される。アウトバック風ハンバーガー1つを二人で分け、暖かい飲み物を摂って、後半に向かう。スピニフェックスの藪で低スピード行動だったため、脚へのダメージは少ない。最後まで攻められるだろう。

この時点でのプランニングの課題は、時間が余った時どのようにルートを膨らませるかだ。いくつかの代替案を考え、同時にこまめに区間の所要時間を計って、最後のルート変更の材料を蓄積する。スピニフェックスもなければ歩きにくい路面もない。こんな楽ちんでいいのだろうか・・・。

元々のプランでは直帰に向かうCP102を過ぎても時間はなお4時間弱余っていた。これなら一つ大回りができる。田島が、どうするか聞いてくるので、可能性のあるプランを直前の区間タイムの状況を踏まえて示す。ナビゲーション的にもフィジカルにもなんの問題もない。実際、地図通り何も問題なかったのも、さらに1時間40分があまっていた。まっすぐ戻れば40分でゴールしてしまう。1.5kmほど離れたCPをピストンで取りに行くという選択肢がある。フィニッシュへの残りの道も林道だし、ルートもほとんど登りのない歩きやすいような谷間だ。ピストンなので時間を決めてチャレンジすることができる。余るはずの時間60分のうち半分で到達しなければ戻ればいい

のだ。一旦は渋った田島をそうやって説得する。

余裕を見て25分と決めてピストンが始める。少しでもスピードを上げるため、田島は空身にして荷物は僕が全部持つ。余分な水も捨てる。高度差は気になっていた。CPがあるはずの斜面が遠くに見えた時には、CPの位置はかなり上だと見えたので、一瞬25分では到達できないと思ったが、アタックで方向を修正してCPについた時はぴったり25分だった。往々にして際どい勝負を勝ち抜けるかどうかはこうした努力によってもたらされる。1時間近い最後の努力が報われれば、次のモチベーションという意味でも大きい。もはや時間に遅れる心配もない。最後の林道を15分歩けばフィニッシュだ。

乾いた大地の中で、最後にたっぷり水量のある川が流れていた。「まじかよ、聞いてねえよ」と毒づきながらも、長距離を歩いて火照った足首に、冷たい川の水が心地よい。既定時間の15分前にフィニッシュ。

結果は2220点で、ミックスベテラン（男子50歳以上、女子40歳以上）では10位だった。地図を眺めながら反省すれば、いくつもの代替ルートは思い浮かぶ。それによって点数が伸びる余地があることに気づく。もちろんそれはレースが終わったから考えられることであって、たればの話でしかない。だが、点数を高める代替案の可能性を実現するための課題を一般化すれば、次につながる教訓にはつながる。食料や水分の制限された状況での長い行動経験、途中での作戦変更で最高の結果を出すための事前の代替ルートの精緻で詳細な検討。あるいはその材料となるデータの集積。全ては小さな積み重ねだが、結果はそこから生まれる。「これでロゲの世界選手権は終わりにしましょう」といていた田島と、次の挑戦のことを話し合っていた。

(村越 真)



24時間ロゲイニングでは、いつでも作戦タイムに茫然としてしまう。だが、それもまた24時間の魅力の一つなのだ



冬のオーストラリアの日暮れは早く、18時過ぎには暗くなり始める。緊張感とワクワクの入り交じる病みつきになる時間の始まりだ。足下にある丸っこい草むらぎとげの痛いスピニフェックス



明け方に偶然遭遇したオーバーナイトカフェ。「サプライズ」だったが、「プリテンちゃん」と読めよ」とも言う。アウトバック（オーストラリアでは日本でのアウトドアという語感で使われる）風ハンバーガーがおいしかった。